

門遠 18
號 704
卷 16

曲亭主人著 第四編

朝夷巡嶋記

歌川豐廣画文金堂嗣梓

明治三十八年
十月九日購

朝夷巡嶋記第四編叙

夢中苦樂非真情也。然有甚於真情者。好讀稗史。小說者。亦與此相似。其繙閱之際。遇賢者。薄命。小人。傲倖。才子。不稱。時尚。美人。歸于癡漢等之事。則扼腕。浩嘆。欷歔。潤襟者有矣。又遇奸邪。發覺。逆賊。誅伏。賢才。應於徵聘。孝節。表于門閭等之事。則欣然。拊卷。喟喟。終日者有矣。顧其事。毫無與於我身。而意之所向。不能自禁者。何也。蓋人性稟之于天。天意好生。而與善苟繙閱入其佳境。得其情狀。則坦然。無私意。於是乎。雖婦幼。理義分明。善惡邪正。豁

如此天稟之性使之然也。古之名人才子為稗史小說以勸善懲惡者故有深意存焉。若夫拘執不通為者咎稗史小說之不合于正史以為誣世惑俗與所云不知夢之為夢而卜其吉凶悔吝不當則咎其夢曰無益於事者何以異之。有或曰周禮春官大卜掌三夢六夢之吉凶。周人取焉。占夢國史及左傳所書尤多。彼稗史小說君子所不取也。子之言之悖得非誣罔耶。余對之曰史傳所載夢想事出於當時小說大約夢之與小說其虛實相半。周雖有占夢之官後世無傳其法者以少驗也。

然一夕遇惡夢者終日不樂賢者因茲倍慎眾人依之此憚稗史之醒蒙昧也。與虛夢之驚癡人一般昔人嘗有戲夢之喻非但戲場之似夢稗史小說亦可以喻夢而夢有脩短猶稗說有巧拙也。自非情景寫得至極之才豈可得能使世俗感動焉哉。余性磊落不嗜為人師唯垂帷辭客讀書綴文以送半生耳。近又所著朝夷巡嶋記數編亦欲倣學胥南柯之類其第四編五卷昨既脫稿因題數行於簡端于時文政庚辰年余月念二日也。

飯台

蓑笠漁隱



朝夷巡鳴記全傳中輯第四編總目錄

第二十一條 容進士柳營 思故人軍監

第二十二條 屯成六牛山 開發鎮守城

第二十三條 拔城義士功 攘魔良將弓

第二十四條 祛邪妙藥方 賊類大奸計

第二十五條 浮雲富貴草 濡衣第古鳥

第二十六條 陣營水醮盃 岐塹淨器舟

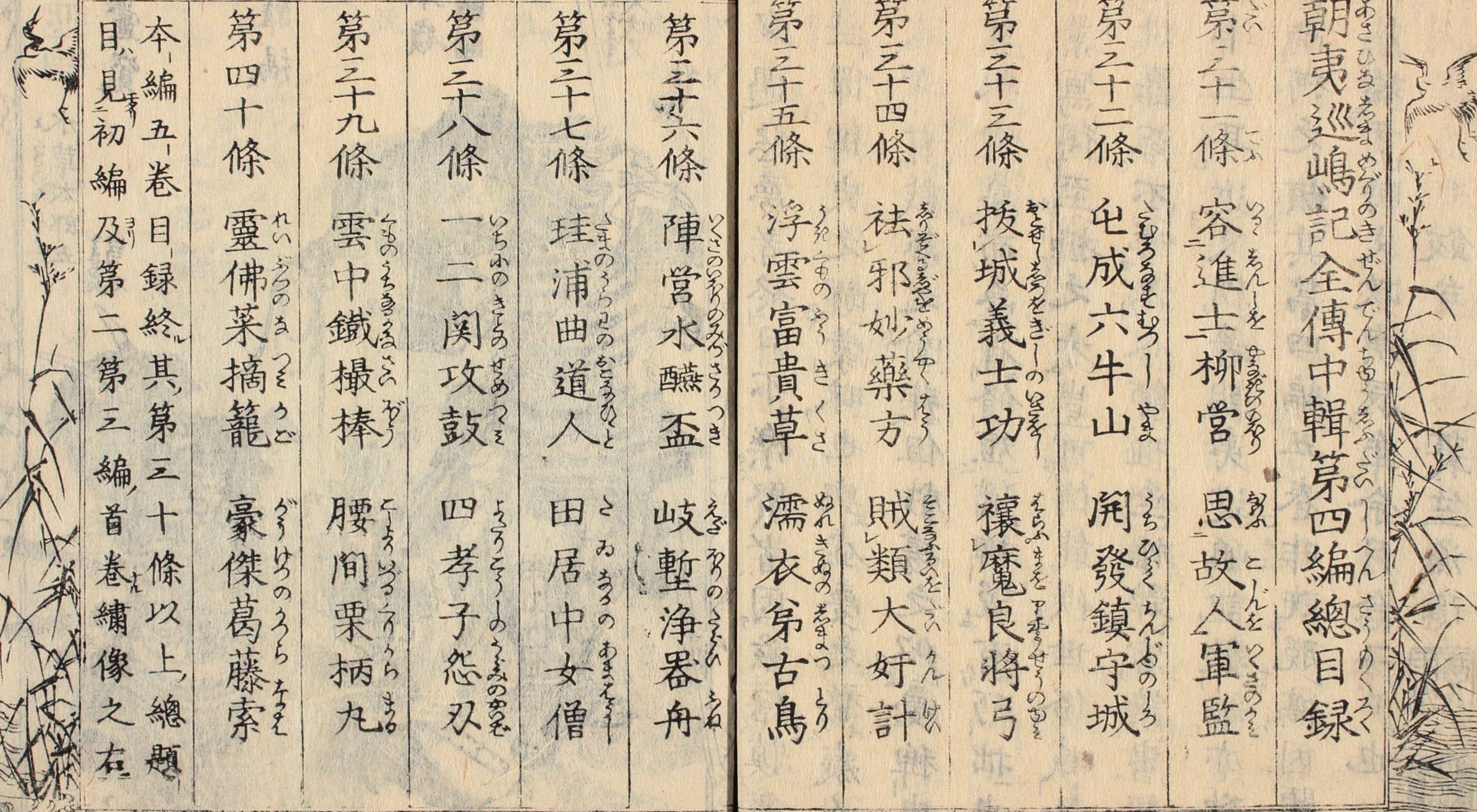
第二十七條 珪浦曲道人 田居中女僧

第二十八條 一二関攻鼓 四孝子怨刃

第二十九條 雲中鐵撮棒 腰间栗柄丸

第四十條 靈佛菜摘籠 豪傑葛藤索

本編五卷目錄終其第三十條以上總題
目見初編及第二第三編首卷繡像之右



狗黨資

水草太郎五

弓之

鳳雛裼

竟

琴嶺

圖

跣犬吠又

陰行



火牛未

珍浦五十六

方相

山頭推

車

火牛既

縦

大克不

袴

鷲齋主人

四

城戸四郎武詮



三夫有

志

相從俱

憂

荒廟為

福

援主復

雙

守忍菴

雙

農夫

藁二郎

圓通尼



奇計反

間

似癡非

癡

信天翁

聰圓

えひをのうせまる
海老尾加世丸



間中隼人守直



清族無不

肖子

名家肉骨

名臣

雕窠爨

四

下河邊

小三郎高吉

是賊中賊

天罰奚遲

芳流舍

雙



鐵猪矢藤五

重連

列傳姓名畧目追加

武臣

三善入道善信

秩父莊司重忠

佐味三内高利

義士

城戸四郎武詮

水草太郎五昌之

隱逸

倍田二郎在義

一名浮槎道人

賊徒

跖犬吠又陰行

象子彈平太負持

惡別當訥愿

鶴夜叉

鴉夜叉

蛭富皿九郎

通計一十二名

畧目を第三編の卷の後に載せしむ

附てこの編絶々義秀ホ三友の再會ハ至ク輟む者官只當面小就ク

これを推さず猶詳さざるゆゑんその義時の邪正光仲の得失義邦の

黜陟義秀の是非ホことそのまゝとす第五編小解分べ就中一段の脚色

次編小多あり年々陸續刊行しとて全本小なることとて姓名畧目追加終

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之一

東都 曲亭主人編輯

進士を容る柳營

中輯第三十一

故人成思の軍監

建仁三年の春二月下旬北條相模太郎泰時ハ多賀藏人光仲ホを侶

伴ク只管路を急ぐ程小太田の莊を出りり第二日の巳のれ及小森

倉ゆを署ゆけるこの小矢口を渡せり比より泰時既小歸著の注進その

實えありけむこの朝執權北條遠江守時政相模守義時評定衆大江

廣元同注所別當三善入道善信ホ出仕しと太郎達一と俟候と泰時ハ

まづ光仲主後を準備の旅邸小留おれとむり柳營小參上歸著のり成

中入と祖父時政待とと馳と公文所小召入ととみづと又乃慈を

訊きこ依よふ泰時たいじ答こたへ。某あつ一昨日いつふけ彼地かぢ小下こげ著あし。駿河すまがは前司ぜんじ小對面こたいめんし。

御説ごせつを傳つたへいひ。小前司こぜんじ答こたへまうし。其その既すで小隱道こいんどうし。鳥髪とりかみの砂すな

弥なし。繼台命ついでたいめい重おもし。いふも今更いまさら弓箭きうせんを取とらへるも。但ただし祖おや父ちち頼政たのまさ卿きやうより

相傳あひつたせし。雷上動らいじやうどうの弓水羽きうみづは兵羽へいはの靈れい前まへハ女によ婿むこゆといふ賀藏がそう人ひと光仲あきなかと

いふの小讓與こせうゐいひえ。彼か光仲あきなかハ廣綱ひろつなが類るい小あむむ。文武ぶぶの智畧ちりやく傑せつかしく。

萬騎まんにきヲ將せんじやうとほへた。其その國くに家のけ為ため小賢こけんを薦すすむ能あたと。率すぢのひらは是これ万民まんにんの

率すぢをたえり。光仲あきなかをのこ。經任きやうにん誅伐せつぱつの大將だいじやう小あまき。廣綱ひろつな則すなは副將ふくしやうとけりし。

陸奥むつハ進しん没ぼつせん。この幾いく御許ごこ容ゆるまれ。其その台命たいめい小あぶら。即坐すなは小頭こづかみ警けいと

前まへ拂はらひし。掛か敷しき行脚ぎやうきゃく小おんおんの。他ほか度たびもたけり。いふ。其その才幹さいかんを試こむ。小智ち辯べん言語げんご小頭こづかみは

某あつ已すでまをほむ。彼か光仲あきなかハ對面たいめんし。其その才幹さいかんを試こむ。小智ち辯べん言語げんご小頭こづかみは

其その武略ぶりやく餘あまりあり。前司ぜんじの吹舉ふきあ虚言こゝろ小あむむ。され。其その意いは任まかし。光仲あきなかを

おくまわれり。其その廣綱ひろつなハ隱道いんどうし。年としを歷わたり。其その經任きやうにん誅伐せつぱつの副將ふくしやうと

とまうし。其その功こうあむむ。鎌倉かまくらハ其その功こうあり。其その名な代しろをたえり。其その數かずも

數かずもねむ。譜第ふだいの老僕らうぼく間中まぢゆう人ひと守直もりちかを召よれ。此こゝ亦また謂いふ。其そのわねハ強こゝろく。其その身みを伴ともふ。唯ただ彼か光仲あきなか守直もりちかハ既すで小參上まゐりあし。其その族うぢ郎らう小あむむ。

其その顛末てんまつ小件こけんの如ごとし。いふ。其その時とき政まつはあむむ。今いま小あむむ。其その駿州すまのちゆうのことは。其その能あたり

其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。

其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。

其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。

其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。其その能あたり。

時夏が謹言ゆゑ、義邦義秀亦も由小一早のあまは罪人となりしが、身の措処は随小武藏の太田又原浪も、藍玉院小技助せしは駿州廣綱の家のり、其の素姓を同宗、遂は六條藏人仲家の遺蹟とす。駿州の養女を妻せ、迺又賀藏人光仲と名告せり。又彼仲家の木曾義仲の兄、頼政卿の養子なり。又光仲の妻せる駿州の養女、且見とせん仲家の女、又光仲へ木曾の老黨、樋口二郎兼光が子なり。しが既小風縁ありのり、駿州より所ある山並、眺みせしや、あれども縁縁の家事あり、漫か心行なひ女をりく妻せり、とて渠よりいひ、心くいで、経任誅伐の大將小吹舉せんや。その素姓はとまれば、仲家の遺蹟あり、廣綱の女婿たる任用せり。又光仲の義とせん、ゆて相見して、そゆへといふ時、政果果と眼を睨り、顔を反り、且はば、忽地小膝を蹴と打ち、班小脱、方齒を見り、呵と冷笑ひ、太郎、日來の拳、動。年歳少増、えゆは、も尚童であり、けふ彼、樋口兼光へ朝敵、木曾が股肱なり、誅戮せし、れ、あま、む、かれば、件の光仲へ朝敵の殘黨なり。うや天地の反覆、し、弥勒の出世、小値、す、でも用のい、も、べ、れ、あ、の、ゆ、と、ぞ、それ、の、ま、む、ぐ、光仲が、媪子、井平、あ、ん、ん、一、早、れ、小、仕、へ、の、之、渠、の、如、此、の、外、口、あり、し、が、下、野へ、追、遣、り、つ、刀、野、時、夏、小、隸、なり、し、小、彼、地、より、逐、電、せ、し、是、小、嗚呼の癡者あり。許さべ、死、奴、ら、あ、む、糸、ど、吉、見、尉、者、う、等、類、な、り、不、慮、の、大、赦、小、の、ま、を、僥、倖、ある、も、小、又、駿、州、を、誑、惑、し、し、その、婿、小、を、隨、小、め、く、ま、死、名、を、つ、れ、く、世、を、欺、え、り、榮、利、を、揣、ち、大、膽、無、敵、の、癡、者、あ、る、を、お、も、ま、お、り、ふ、り、か、ゆ、ぞ、又、駿、州、を、さ、り、ゆ、ぐ、り、彼、奴、を、木、曾、の、殘、黨、と、さ、る、も、女、婿、小、せ、し、野、心、か、し、い、は、く、も、その、骨、髄、を、推、さ、く、り、か、ゆ、罪、車、小、

時夏が謹言ゆゑ、義邦義秀亦も由小一早のあまは罪人となりしが、身の措処は随小武藏の太田又原浪も、藍玉院小技助せしは駿州廣綱の家のり、其の素姓を同宗、遂は六條藏人仲家の遺蹟とす。駿州の養女を妻せ、迺又賀藏人光仲と名告せり。又彼仲家の木曾義仲の兄、頼政卿の養子なり。又光仲の妻せる駿州の養女、且見とせん仲家の女、又光仲へ木曾の老黨、樋口二郎兼光が子なり。しが既小風縁ありのり、駿州より所ある山並、眺みせしや、あれども縁縁の家事あり、漫か心行なひ女をりく妻せり、とて渠よりいひ、心くいで、経任誅伐の大將小吹舉せんや。その素姓はとまれば、仲家の遺蹟あり、廣綱の女婿たる任用せり。又光仲の義とせん、ゆて相見して、そゆへといふ時、政果果と眼を睨り、顔を反り、且はば、忽地小膝を蹴と打ち、班小脱、方齒を見り、呵と冷笑ひ、太郎、日來の拳、動。年歳少増、えゆは、も尚童であり、けふ彼、樋口兼光へ朝敵、木曾が股肱なり、誅戮せし、れ、あま、む、かれば、件の光仲へ朝敵の殘黨なり。うや天地の反覆、し、弥勒の出世、小値、す、でも用のい、も、べ、れ、あ、の、ゆ、と、ぞ、それ、の、ま、む、ぐ、光仲が、媪子、井平、あ、ん、ん、一、早、れ、小、仕、へ、の、之、渠、の、如、此、の、外、口、あり、し、が、下、野へ、追、遣、り、つ、刀、野、時、夏、小、隸、なり、し、小、彼、地、より、逐、電、せ、し、是、小、嗚呼の癡者あり。許さべ、死、奴、ら、あ、む、糸、ど、吉、見、尉、者、う、等、類、な、り、不、慮、の、大、赦、小、の、ま、を、僥、倖、ある、も、小、又、駿、州、を、誑、惑、し、し、その、婿、小、を、隨、小、め、く、ま、死、名、を、つ、れ、く、世、を、欺、え、り、榮、利、を、揣、ち、大、膽、無、敵、の、癡、者、あ、る、を、お、も、ま、お、り、ふ、り、か、ゆ、ぞ、又、駿、州、を、さ、り、ゆ、ぐ、り、彼、奴、を、木、曾、の、殘、黨、と、さ、る、も、女、婿、小、せ、し、野、心、か、し、い、は、く、も、その、骨、髄、を、推、さ、く、り、か、ゆ、罪、車、小、

斧鉞を授け軍兵を従せしむ。此度の大将小せられ任を失得討せしむ。
 二張の弓と雫と死致是も亦もあはれむ。井平奴を追ひ入せし由も
 遠慮の然りしと云ふも。彼光仲を朝敵の残黨とせしむるの聊道理小
 協ひがごとし。時政と亦いふと眼を反せばと云ふは。樋口二郎兼光の義
 仲栗津野ゆゑ殺れし後降入小なりと云ふ所の之念をその比都ゆゑ
 誅せられし判官の猜忌よむる疎忽さるべし。や兼光が降参し其の
 降参さるるごとと大姫君逝去の比。大姫の頼朝の息女義高の内室なり。義高の
 御追薦の放生小二位殿の御意と云ふ木曾氏の残黨は。みか
 思救せられし。高の御子のかまづ光仲の樋口二郎が子ありといふも。
 朝敵残黨の候を以忌嫌んハ道理小違へり。且六條藏入仲家ハ木曾義

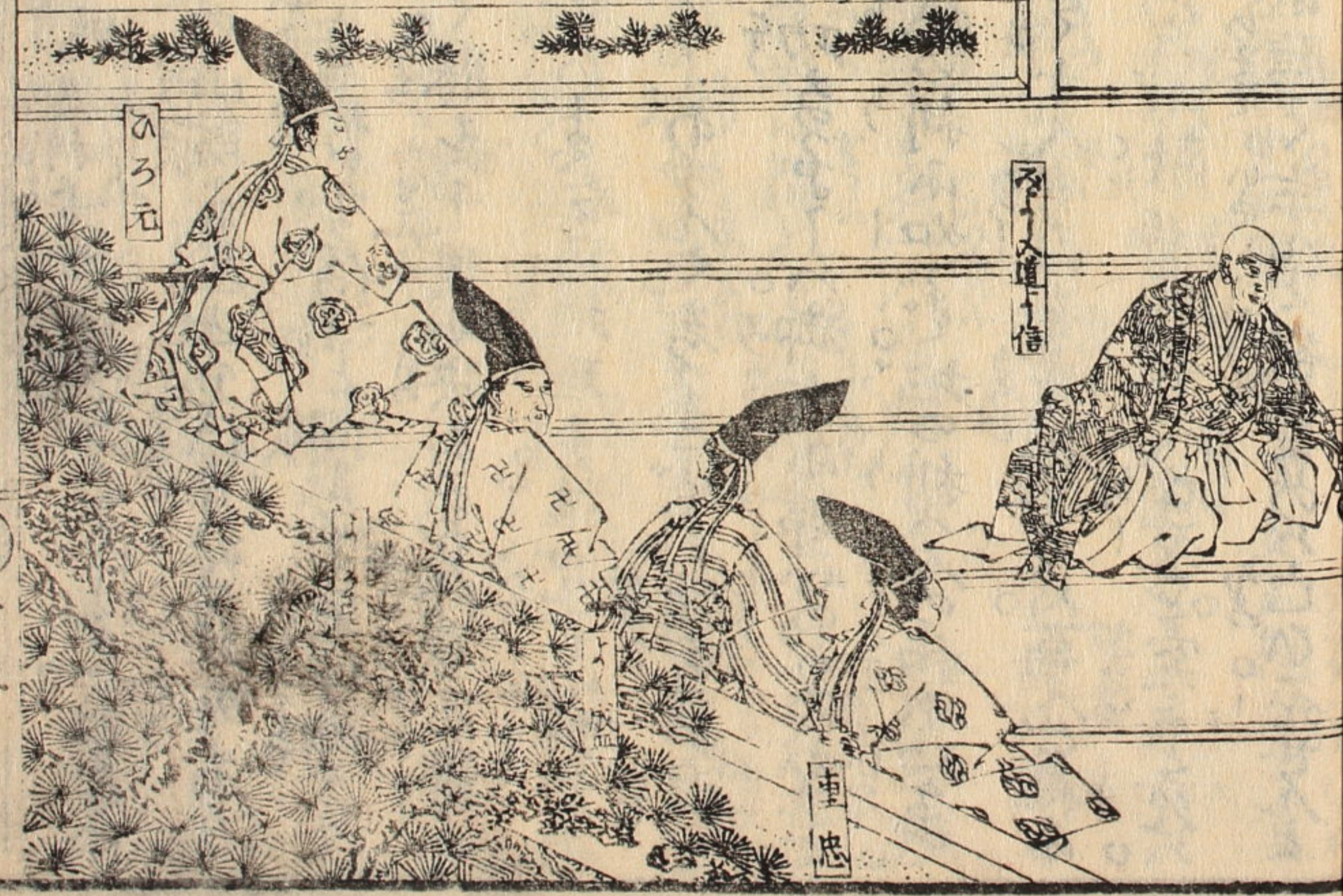
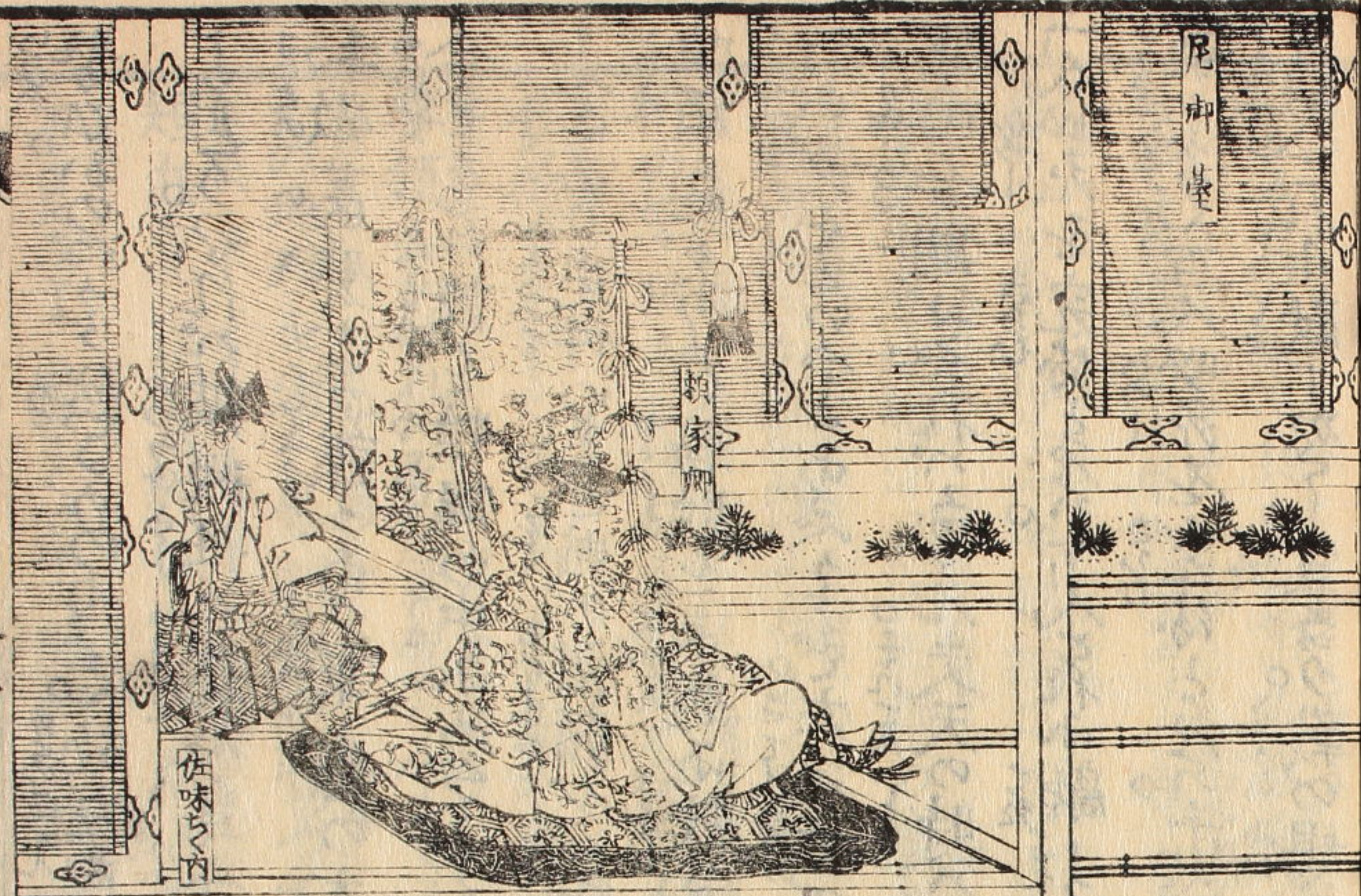
仲の兄もと云ふ位入道。の養子なり。宇治河の戦ひ小その子藏入太
 郎と共小平家の大軍を殺戮せし。父子陣頭小戦殺せり。かまづこの
 後之候の勸賞あまほり。光仲既小仲家の遺蹟くらのあふ。
 經任追伐の大將小より立させしむるも。相応ハかまづ。泰時弱冠し
 と云ふも。柳宮の女使なり。俱しく来り。光仲をそは。追之し。世の
 嘲りをいふせん。再度の評議さるる。と。憚るさき。諫ふ。時政と。重乃
 といふ眉根と。そ。沈吟。彼光仲ハ。井平。追伐の
 大將小。大將小。世の胡慮さる。さ。難。義時
 かの。不。愚。接。異。昔。前。漢。の。霍。去。病。平。陽。侯。曹。壽。が。家。吏
 なる。中。孺。と。い。の。陰。子。ち。り。去。病。ハ。驃。騎。將。軍。小。拜。せ

らと内奴を殺さく大功あり近く天朝源頼信朝臣へてめ根家の家
 令さう死さうれども。冠位後四位上鎮守府將軍左馬權頭小昇進し。
 内昇殿を許されし。武略神妙の聞えり人を有り少實を取るべし。さう
 虚名小惑これんや且光仲の徳角の比し名もく京鎌倉小浮浪し。さう
 らく大人小仕へし。その願ひゆらあどか。夫潘龍のいさ。時を想ひて一日
 穴を蟬鱗と俣ゆきと終小池中の物小あさ。集が大人小仕へし。日
 その賢をさうさう。遠く下野へ追退り。今その賢をさうさう。これを
 用ひる。是愆を累さう。小ひつむ。さう。家小仕へし。のが國
 家の大任小當らん。家小の譽あり。他人の羨む所。如神。東國ゆて
 名もく武士を甲乙と擇用ひ。賊を撃せり。小再度の戦ひ。その
 利さう。奥羽へ。擾騒ん。かて。老切の勇士と。又その暮小

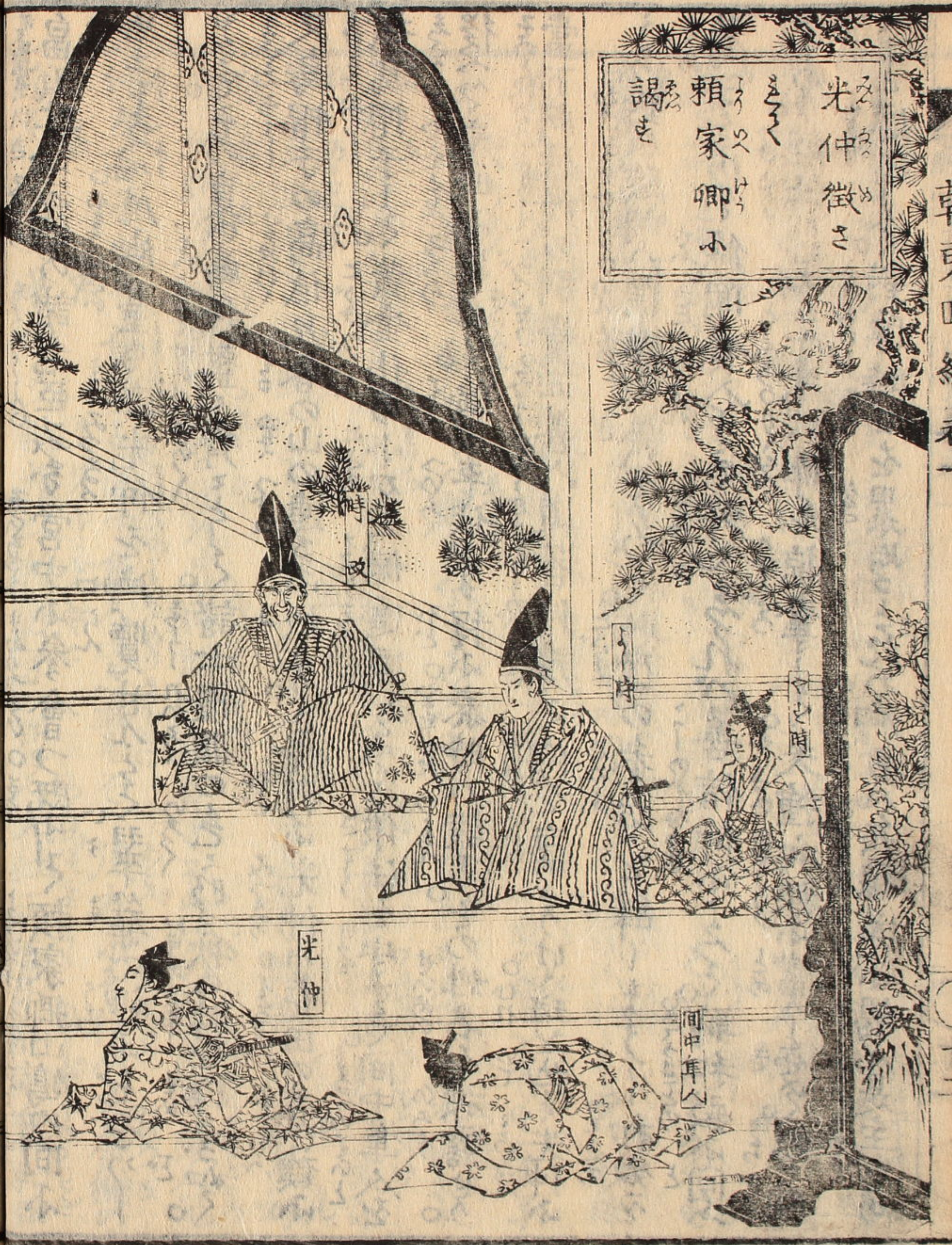
應もさう。光仲へこれと異之進。賊を撃さく功あり。賢斌招く。乃道
 武を將。一樹さう。又その戦ひ。利さう。さう。御方の
 傷損小さ。猜忌の臆念を。さう。駿州の吹舉小任せ。あへ
 安全の議さう。と言葉と盡し。諫さう。廣元善信感嘆し。相州乃
 異見道理小稱へ。愚老おが。何うわん。又の越を
 言上。光仲を召す。猶亦武畧を試さう。その才あり。のさう。任用
 わさう。けと。衆一同小勧め。さう。時政ハ已。さう。遂小この後小
 隨のさう。義時と共小泰時を。さう。尼師臺のさう。方小。さう。廣
 綱の吹舉。光仲のさう。義時おが異見の越。さう。さう。あけ。さう。尼師
 臺。さう。領れ。さう。婦女子のさう。あ。さう。人を知。さう。あ。さう。相州の
 異見。さう。公論。さう。疾將軍家。頼家。さう。あ。さう。その光仲と

中ん用へつたのるるがとろく相計ひをせとてと叮嚀小仰多時政義時
 うひまろく。躬て將軍頼家卿の古又の趣を言上り明日賀藏入状。
 召さるべしとぞ定めり。この時頼家卿の日夜淫酒成度とて政小親も多む。
 或とて大雁鳥を放獣と狩く。遊山散水の為小民の愁成物とせむ。あは
 とれを鞠と戯。雙陸小興を催して酒宴遊興の為小國の費と首とてはふ
 より。奥六郡の賊乱いまで鎮まらぬ。あはれなる氣をも多く。又光仲もが
 る。然やけさもみづも。擇用ひんとも多む。されば國の大事ハ執權北條一家小
 む。尼御臺の決断小あり。この故小忠臣ハ遠ざけり。諫言の路塞り。奸
 佞ハ時をぬく。諂諛の門を開れ。う同話休題か。くその次の日賀藏入光
 仲を召ひ。うりて登營と。向中隼人守直も。そが後方ゆぞ。後ひる廣綱の
 名代も。まじりて。是ゆり。執權北條親子ハ。あはれ大江三善の評定衆。和田

畠山比企三浦の諸老臣も。營中小參會つ。既而く頼家卿山鳩の間小
 出ま。まへハ。尼御臺も。亦光仲を御覽せん。とて翠簾の裡ゆぞをり。
 やつと。その支の為。体整齊と。と。諸士禮服の色。秋の林と。染る。如く。
 又烏帽子の高。低。春の山の連る。似たり。さ。後。程。小光仲ハ。花田の素禰小
 楸。烏帽子。と。黄金作の小刀を佩進退と。と。作法を守りて。向中隼人を
 後へ。奉。時。小導。れ。と。遙。小。平。伏。も。程。小。奉。時。ハ。謹。く。その。姓名。を。披露。せり。
 當。下。向。注。所。の。別。當。三。善。入。道。各。信。豫。と。仰。を。稟。上。り。けん。斑。と。知。り。光。仲。小
 うち。對。ハ。駿。州。ハ。隱。遁。の。義。を。の。り。と。此。度。の。參。府。と。辭。し。ま。う。り。和。殿。を
 薦。ま。り。め。條。聞。食。入。と。り。所。と。あ。れ。ば。善。信。仰。ふ。と。聊。和。殿。小。同。ふ
 こと。の。經。任。ハ。この。年。來。六。郡。を。掠。奪。し。と。矢。種。兵。糧。小。富。り。と。仰。り。數。破
 る。と。速。る。と。對。陣。時。日。を。累。ぬ。と。死。ハ。御。方。ハ。兵。糧。遂。小。竭。人。是。王。客。の



光仲
徴さ
頼家
卿小
謁



勢ひかのづゝ然るのゆゑ。故左典厩足利後継の功ありしもその小の功ありしもその小
 よもろかれば彼經任の寔小鳥合の山賊あるも傍りかた死呀あり。
 和殿甚麼まろ謀るある軍慮の大意はすあり。と問まろ光仲袖う丸
 合せさゆ謀を帷幄の中小めづりし。勝を千里小決まろゆれは良將の
 うふあり。光仲ゆも賊の強弱を見まろその地理を推せ九小暇あり。
 唯居まろゆり勝敗を未然小訣るゆりあえや。あろまろも順をめて逆と
 討小克まろゆとあべまろ左典厩の功ありし。御方小野心のゆあり。
 軍略合期せまればあえん夫天の時ハ地の利小如まろ地の利ハ人の和小如まろ。
 一入必死を究ゆとまろ十人これ小敵。まろ十人必死を究ゆとまろ百人これ小
 敵。まろ百人必死を究ゆとまろ千人これ小敵。まろ千人必死を究ゆとまろ
 萬人これ小敵。かろ。宣まろ。戦の場小臨まろ生んと欲るゆめハ亡び死せん

欲まろゆの生く兵を寔小函器まろ。この故小三軍小將とるゆめハ獨功を食
 らも苦樂を士卒と俱り。軍令を正し。賞罰を明め。よく死士と
 養ふあり。孫子の地形編ゆゆまろ卒と視まろ愛子の如く。故小俱ま
 死まろ。九地編ゆ又云三軍の衆を犯まろ一人を使まろ若くま。こと
 亡地小投ま。然後は存ま。これを死地小陥れ。然後小生とゆ。九兵を
 行の要彼を知り。己を知。必克彼を知。尚己をま。これハ勝。或ハ
 負彼をま。己とま。戦小必負。是孫氏が誠るゆゆ。攻伐の
 要領ま。かればその軍畧ハ今ま。と議ま。一は賊塞小臨ま。
 その地理を考へ屢賊兵を誘ま。その虚実を察し。機小臨ま。亦ハ心して
 短兵急小拉ま。經任幻術ありとゆ。ま。の施ま。暇ま。奇正
 每度小よく當ま。速く賊柵を扱ま。彼が矢種ハ我有ま。渠が兵糧の

多々ゆの即御方の資まう。こ成りく其の兵糧の續ごえを思ひさせん。
 只經任が首を獲るの一日と速まうえとを思ひの是併君の御威徳小
 依るのゆ。叨ふ才望と演るふあまを尊向黙止ごえゆり。聊愚
 意をやうの過言の許させまう。とあまう。答へる善信入道のこえ
 將軍御母子をこらあまう。大江和田島山の諸老臣のく耳を側くその
 宏論ふ感服。現廣綱の吹舉私情ふあまを經任追伐の大將ごえ
 人ふやあまのあまう。とあまう。さうけ。その中小時政の目を斜めく光
 仲をこにかうこんと半响をり。その人ごの美しれその辨論の交まう。
 絶くむの井平あまを集いの向小習語ごか。遅れりあまのあまう。いん
 寔小人の才まう。掃アかたあまのあまう。とあまう。ふいと暗くとあまの
 出るともあまを義時ハその氣を察く廣元よ目を注はれ。廣元

なくその意成ゆ。同列小會釋ら各位何とあまの蔵人の才器その
 任小當より。萬幸ハ甚易く一將を獲難く任用せまう。あまの牧野存を
 中上とれよ。このふ義盛重忠小辞ひく。嘆賞。彼人の義論甚し。
 駿州ごまが副とまう。功成んと疑ひまう。薦揚勿論小ゆ。衆一同小志一。
 時政ハ已とをゆ。躬くあ前小まう。衆議の趣を執達。且奉る旨
 あまの退死く光仲小ら對ひ前駿州の壻と賀藏人此度その薦小
 因て即進士小擬せれ。新小御家人小召加。經任退治の大將小仰付を
 駿州と共に奥州ハ進茂と。日まを功を奏まう。これ小ら。武藏下総の
 守護御家人小別小御教書をまう。軍勢催促。引
 領く。後向せれ。但し光仲官職をまう。大軍小將。東國の武士
 俵りて。その軍令小後ふの稀まう。今假小外後六位上小叙。藏人

ありしに、叙爵のり、使者より京都へ執奏せらるるに、
 存まじしと最ふ命を傳へ、又守直を召近し、此度藏人をり、
 治の大將おんより立上り、駿州の之より、小依せり。
 かれは駿州これ副とて、大功を立せり、台命既ふかの如し、
 主ふ告り、これ彼より、先仲守直唯こころ、恩命と拜
 謝せり、當下先仲ハ席を避く額を著り、某草莽浮浪の身とて、
 慮、御家人ハ召加ら、刺此度の大任を奉り、いまだ毫末ハ功あり、
 志も過分の冠位ハ貸下さく、條莫大の榮あり、恩命今更辭し、
 答ふ由あり、志はバ大馬の勞を彈くと日をも、逆賊を討滅し、
 願ふに、功なきは、願ふに、軍監を、進退さく、いと希ひ

まう、頼家卿せせり、光仲ハ遠慮その由あり、誰をか、宣ふ
 程、佩刀ハ候し、佐味空内高利、頭首さく、其ハ往歲
 蹴鞠の技とて、側近ハ使、鴻恩微軀ハ餘とて、御用ハ立
 鏡を撃、堅と壁、斬土の埋草とて、忠勤を勸じ、某加北ハ入
 邦と学、窻小臂とて、一面の交あり、冠者ハ諺、賊ハ為、
 存亡定、賊と聞り、かれハ某進、賊を撃、君の為ハ害と
 除、友の為ハ怨を復、公私の情願、この舉あり、御許容願ハ、
 當る、原是一個の匹夫、幕府譜第の家臣、あは、かき

その軍監とて入る。鎌倉武士へみちを差へし内が所望時宜小協へとる
 へ。思せしは延佐味竺内を軍監とて光仲と俣又陸奥へ遣は
 せし。仰出され光仲廣綱と御教書を賜つ征伐進退その音も任
 きては平大功を立べしと再々命せられし光仲守真恩命を禀奉
 して遠侍小退死けり。かくこの日當坐の老輩及當番の普侍まで
 光仲が所へ来り。姓名を告がけし。慶賀を述べし。要時へ引も
 たりし。面目身よわきをてて見えし。その中小時政へてる。竊小
 恥しし。けん光仲を尻目小うけし。されども知るぬ面をまされば光仲も
 鎌倉小逗留の程軍議公勢小かづらひし。執権の邸小赴れ對面と
 請へ折も時政へは存外とて多く款待し。昔年のる成りひせし。又義時へ
 泰時とて光仲を問慰めいと懇切ゆを管待ける。光仲は是彼り親

疎小うとて多ふ。執権のつれとて多ふ。そのある察し易し。相州義時の
 真實とて志れし。その宵中掃く。されば此度の大任へ幸ひ小似て却
 危し。前司敷廣綱の隱遁へ故あをけり。と彼小就こまふ。就ても毎夜小
 いひ。かそは慎とけり。是しを先小間中車人と台命の慈を廣綱と
 告ん。とて後者をばり。武藏ある太田の莊へかへり去り。光仲はその日より
 佐味竺内が弟小根とて軍兵をまら。程小竺内へ光仲の人柄と京慕
 多と。竊小巴が志を説示し。又義邦の夏をうと折小觸ていひ出たり。
 光仲も豫てより竺内が名へゆつ。まづその入とてり。推とる。小学向も
 大と。忠義の仕使さうけし。渠が遊藝をのり。頼家卿小仕ま
 つ。その本意小あはれ。とて小稽し。疑ひと下野みく。あやむ。
 義邦のうへにあり。廣光が。朝夷が。去年の暮春の三日の夜小

勝澤の松原めく時夏未を防田めくる夏の紛ふ義邦別れ後の
 こころ入る憂驩若樂幸不幸まじくおちる物くまは二内ハ義
 邦の薄命を嗟嘆しん。且勅小官途に進まると豪傑の圖居小
 得値はと遠城を限りあり。志ふあまんと此度の軍小後と月来の
 素懐小稱了。彼人擒小をせぬともまは恙まくもらん小ハ義をこんく
 中々しく勇まあやと火急は柵を攻破く再會その期あるべしと頼小
 軍兵を催せども名あつ武士ハ光仲が下風小立んことを恥てその催促は
 後つと十日をうまを歴る程小武藏下総の端武者百五六十騎總に
 参集ハ一ハ今ハ何日まかく俟つ死とく光仲馳出陣之時政を告小
 ける志くれども頼家卿ハ日ごろの醜辭ゆるきて聊不例ありこれハ再て
 見参小入るふ及びま廣元善信奉りて軍用兵糧の下知を傳へその
 日ハ暇をまかりハ光仲ハ次の日の未明小件の軍兵を招と佐味笠内
 高利と共小鎌倉を辞しきり。その明日の曉昏小太田の莊小馬を
 よらまハ廣綱も豫てより出陣の準備しと二内高利小對面一日
 人馬を休めさせく。衆一同小進發を老るるめハ甲乙と。且見姫小隸
 らましく莊院小苗アる。その他間中下河辺加世丸ホハまより一郷の
 莊客們も廣綱の徳義を慕つて。血氣壯たるめハ招されども
 後ハめり。まは二百騎ハ足とさりけり出陣の規式苗別の情状ハ説
 とも小想像ス。さる程小光仲廣綱ハ途まか軍兵を催促しとく
 すまむじ日来經く。陸奥の國府小著しハ五百餘騎ハまより小け。

中輯第二十二
 屯成六牛山
 開發鎮守城

三賀進士藏入光仲へは五百騎小過されども勝負ハ兵の多し少し
 よも速小寄近づく。賊の虚實を察んとし廣綱この後小隨ひて。
 鮪く函府をうち起つ五百餘騎と二隊小けく光仲と先鋒をり。
 廣綱の後陣小打せく。夜小宿り日小進み賊の大將蘇塗三鶴東二
 刀野時夏木が楯籠る鎮守府の城は程近れ六角牛山の麓なる。
 要害の地は屯せり是より先廣綱ハ諸軍兵小示さす。これ年来
 弓筋を捨く栄枯の際を脱離せり。此度の副將たるめハ已と依
 得ざるの義あり光仲が智計ハ廣綱小過く遠し。更小助言よ
 及どく渠かのづつ武畧あり。こゝより當家相傳の弓筋を既小
 彼人の讓とす。經任幻術あり。いふも靈弓神箭の徳也。虚かた
 んや。更皆鎌倉殿のちん為さる。かのく一致のさるりて軍中を勵む

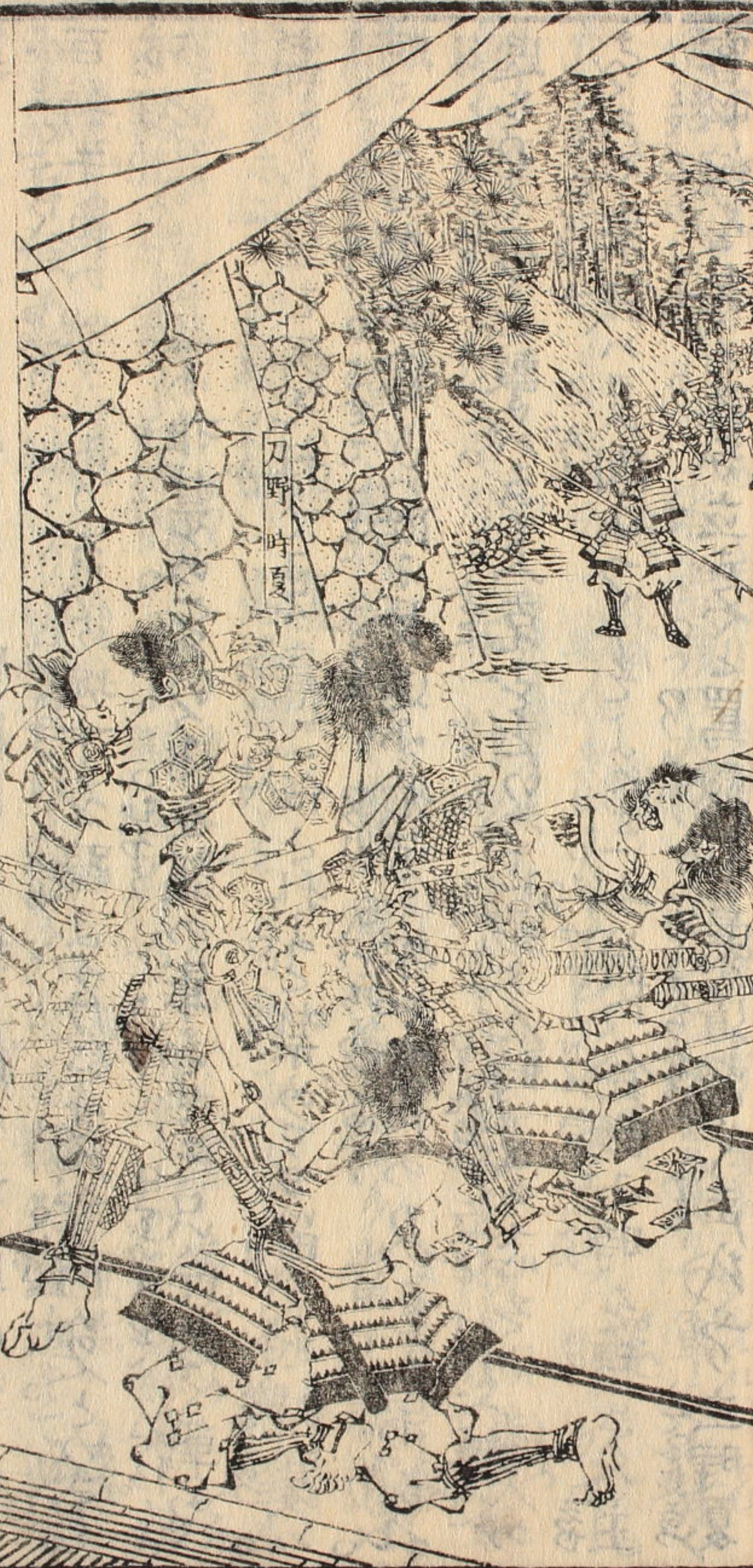
へ。と説諭く。さるが成光仲小任せり。きんも光仲ハ自己の才学小誇
 らど必まが廣綱の旨小より。事を行んと欲せし。廣綱をめて後りど
 凡大將の爲めの賞罰まぐる。そのふさ。天子將軍の仰とゆ。ま
 用のさ。和漢今昔三軍小將さる。副將軍の指揮と受く。
 更を行ふ。攻伐進退和殿の隨意あり。廣綱小向みと
 久と制く。直を聽きけり。この夏の趣を軍兵未傳へ。駿州
 まさかの如し。大将不測の軍略ある。いと憑く。絶く
 悔る。め。光仲ハる。礼儀を正し。士小下り。賞罰を明よ
 多く。これを將大く。け。士率み。款。爲小死ん。を樂ひ。これハ
 又光仲ハ嚮小鎌倉をうち起く。馬を太田へよせ。比竊小海老尾加
 世九小謀を授く。汝ハ。兵十人を。馬商の

模様小打拾間道を走く經任が厨川の柵小赴丸風いと烈し死日を
 俟くその兵糧を燻うし追伐の軍兵より追ふとゆるが經任只その前
 御死して後の成平小等周をえんよとせしめと説示せ加世丸はころ果て
 馬高小打拾諸軍兵小先とちとちと陸奥へぞ赴たるとさ程小
 鎮守府より蘇塗鶴東二暴道追討の大將寄るとして間諜の
 兵を遣し敵の虚実を探らば小此度寄手の大將ハ駿河前
 司廣綱の婿多賀藏人光仲といふのふしと廣綱とさ副將より
 その勢練小五百騎より過へるを既小切如紙とる塞たると六角牛
 山の麓は屯まるとその告ありけは六暴道馳て騎馬を平
 泉小まきとせて經任小注進し俄小四門の成を倍く刀野時夏小と
 集合とのあつる曩は足利左馬次義兼累世名家の上將とて數
 千騎を招く寄せりしと平泉小く火攻せしれく只一戦小利成
 喪ひ立足もろく逃亡り死況て此度の大将も多賀とやん光仲
 とやん名をとりやとるりりめと只彼廣綱ハ源氏の類族なりと
 といふも壽永元暦の間源平の戦小まのりたるともろく差と道世
 せりめろまよその本度推くろと加いこの軍兵ハ五百騎小過と
 といふはころ小足とのあつるねと侮るとは悔あらんまろく敵のよ
 るやちとろろの隨小防戦ハその兵糧の竭る小及く襲て出るの
 るまよ一騎も生て還えんや防禦の術肝要ありその部ハ如此とて
 軍配を定むるめを時夏ハこの月来暴道が下風小とて朽をく
 るろをりく今その軍議をせしめと扇を採り信と見えろ鶴東二
 怪しと我吾們當城の大將とくと五百餘騎を龍らとて小間近き

千騎を招く寄せりしと平泉小く火攻せしれく只一戦小利成
 喪ひ立足もろく逃亡り死況て此度の大将も多賀とやん光仲
 とやん名をとりやとるりりめと只彼廣綱ハ源氏の類族なりと
 といふも壽永元暦の間源平の戦小まのりたるともろく差と道世
 せりめろまよその本度推くろと加いこの軍兵ハ五百騎小過と
 といふはころ小足とのあつるねと侮るとは悔あらんまろく敵のよ
 るやちとろろの隨小防戦ハその兵糧の竭る小及く襲て出るの
 るまよ一騎も生て還えんや防禦の術肝要ありその部ハ如此とて
 軍配を定むるめを時夏ハこの月来暴道が下風小とて朽をく
 るろをりく今その軍議をせしめと扇を採り信と見えろ鶴東二
 怪しと我吾們當城の大將とくと五百餘騎を龍らとて小間近き



暴道時
夏名軍
議を
角



敵を追ひの拂ひ居るがその前を受んと後難のて脱るべき和
 殿はとまれくもあはし時夏は當一當く寄るふ白沫吐せくれんこれ
 と多ん徒はなやこの後不後れよと敦圍たて論も且早雄の賊
 兵本大之をさむと雷同一刀野殿寔不然之敵も五百騎味方も五
 百騎牛角の勢ひありまぐ城下を蹄より入るや誘め人といさ
 ぶを見道急小推材めふのふを謀の軍ふせそ只今出く戦ひ
 寄るの望む所を枉くこと意は任されよと禁めて申すと時夏は
 呵くと冷笑ひ寄るに既小長途小疲勞一不知業肉のりのめをあれ
 逸をのく勞を撃むるまぐ克むといふとあらん時夏は志を則衆人の
 ありの衆議の言聞ふつてよき益の食議小時を殺さる主
 客必位を易んみふ立むと罵駭けし暴道怒く声はふり立時夏

倘若無人とこれ苟も當城の大將より一己の功を貪りて軍令小背く
 めの斬らんまぐとせむ戦んを欲するものといふまぐ制一
 進く敵を撃んとまぐこれ亦一計あり鎮りてせむとゆらやと哮と
 制まぐ時夏僅小亂成おめく舊の席小著よけり當下暴道は
 時夏ふらち對ひぬ敵を撃んとまぐか意ぬあらんも衆望も
 亦黙止がうまぐが太郎の三百騎を招く六角牛山の屯を移へ敵
 小も必斥候あらん城より運下各居とせむは屯を釋れ逆進して必合
 戦まぐ死するもまぐ輕く戦う偽負く敵と誘へられ百餘騎を招く
 龍蛇茂林小埋伏とその過つた後陣成撃人太郎も一軍とて
 返しくと攻撃の戦必勝疑ひありまぐ敵もその伏兵あり
 と察しと逃るを追ふ物よりと城小入る寄る本

陣小還す比ハ途内く日ハ暮らん。且其の百騎を招く。潜小敵の
跡成つ。夜小紛きて風上より火を放く。屯と燔ふ備とある暇あて。
敵兵必乱と騒がん。太郎ハ又黄昏より。二百騎を招く。城を出通火の
發るをこん六走く。六角牛の屯小推寄せ横さる。小その逃る。光仲
廣網翔あつと。小唾く。擲小多るべし。時ハ未の下討之出陣既。
その期小協つ。と。と。時夏未ハ悦い。腰兵糧の準備し。
俄頃ハ城の東門より旗を進め。うち出れ。早雄の賊兵二百騎時夏小
後より六角牛を望み。寄せんと。その暴道の賊兵百人を留て城と
守らせ。身ハ百餘騎を招く。潜小西の城戸より。城を去ると。十四五
町。龍蛇茂林小埋伏と。敵の過るを俟く。と。程小進士藏人光仲ハ
この六角牛山の麓小屯く。と。間諜の兵を招く。賊の動靜虚実を

窺せ。この日廣網高利を。守直高吉木を。聚合く。合戦の後を。同と
一ハ佐味高利が。某昨夕六角牛山小登りて。遙小鎮守府乃
地形考へ。在曉の月れ出る。平泉のを。眺望く。小それ
猶遠く。東北の。當り。天色赤く。然由昨夕ハ甲夜より
東南の風烈く。經任が平泉の柵。厨川小変あり。
路遠ければ。否定。と。光仲微笑て。某も
亦これを。是則別事小。日海老尾加世丸。と。竊小厨
川へ遣せ。渠小。彼。その兵糧を。厨川乃
柵。經任が根城ハ。武器兵糧ハ。其。小。追伐の軍
兵。及。根城の兵糧。燒亡せ。經任。疑。反忠の
め。是。賊と刃を。その銳。折く。

その謀も云云と云ふと密に小説示せし二内高利と云ふ守直高
 吉ホ又その武界感佩せり折しゆれ山風颯と云ふ陣門小建
 たりける鋒識を吹断く鋒ハ西へぞ傾けける衆皆これをええりて脊一
 色を失ひつゝ必御方不利ありとあふ思ふと思ふと思ふと
 多々黙然と云ふ中又廣細の騒だる氣色も藏人今山風の鋒を
 吹傾けしゆれそあふめと云ふ知ると聞くと要時沈吟しこれハ
 今一陣の狂風の東北より吹来たり便是賊の大將ホが推籠る鎮
 守府のさふ直まろかま六賊兵數を盡く逆せたる兆ちるん欽先
 主を人を征し後々と云ふ征せざる然らばあふもか出しく逆撃必利
 ありん尊意ゆふと問久きその辞りまご詫らど斥候の兵走還す大
 床のすもふ來り賊軍一隊三百餘騎あることを望しゆせまたり間計

町中過へるも防禦の術と急せると喘まきも廣細使てとら領ま
 さまつて藏人が討る野小過るる合せの戦の物と軍配せまき
 よといひまて光伸一議及ぶと云ふあふのぬ某の三百騎を招く先
 鋒小進むべし大敵ハ百五十騎を招く後陣小續せまらん欽某豫より地
 圖を考ゆ小鎮守府と距ると十四五町より龍蛇茂林との切廻あり
 樹立隙さるる路いと暗く人馬の進退不便の地之彼蘇塗暴道の
 經任が軍師ゆくと智術ありめと云ふあふの先隊とてこれと
 誘ひ伏兵をめて撃んとまら欽易ゆふ三翼を風と木とと異ハ辰
 巳より且風木と象まらと云ふ今狂風の鋒を傾けるをりくその
 吉凶悔吝を推しる暴道ホ龍蛇茂林小伏兵と不意小起て
 撃んとて計るめ賊の策小就くこれ亦謀あり下河邊小三郎ハ

五十名の兵を招く。間道より竊小進む。彼社の後小遠で出賊乃先陣敗北せむ。や彼此小火を放て。件の社を燔立。賊の伏兵ありといふも不慮の猛火。遠迷ひく。その謀合期せむ。案亦偽の敗軍ハ真の敗軍と形見死せむ。とていそが立。高吉ハあつろをひく。五十名の兵小その謀を信ず。準備の火薬成推乃て志のびく。山下路の捷徑をりてめてぞいそが軍配既小整へ。光仲ハ二百騎をみて。三隊よりけり。佐味高利。間中守直木を左右小備へさせ。鞆搦練り。馬衆出せむ。廣綱ハ百五十騎を招て。徐ハ後陣より續多。光仲ハ馬の足撥を早め。西くと十餘町より。果して前面小賊兵あり。兩軍礮と撞見し。間近く。さす。小佐味。竺内高利ハ馬を陣頭小乗進め。さす。さす。の誰と。同ハ當下賊將時夏。鏢乃上。大荒

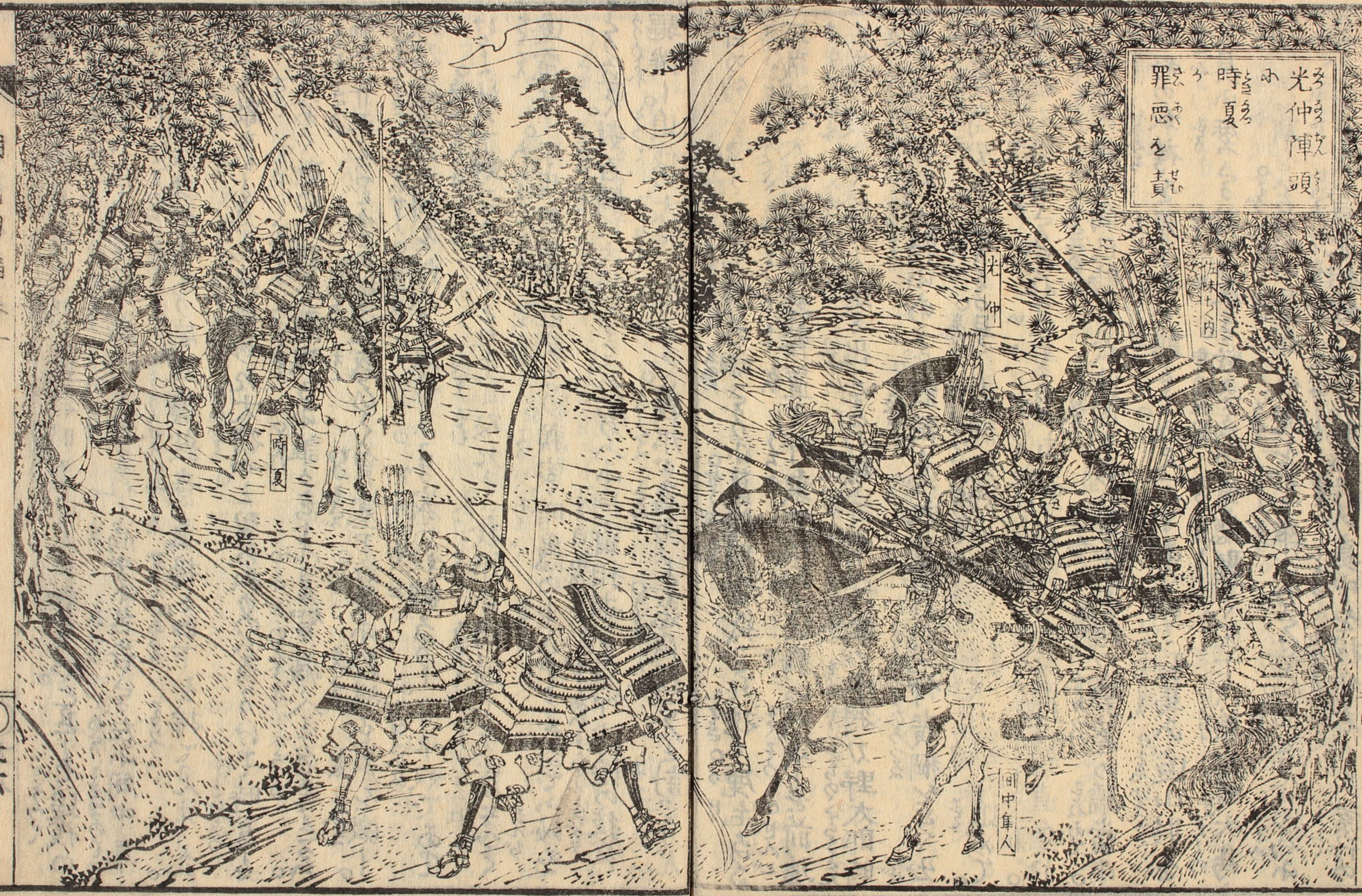
目の鎧を思。備前長刀の鏢さ。小菅蒲形。さ。成。は。挾。鹿毛。さ。三歳駒の太逞。小雲珠鞍置。打乗。二十六騎の賊平を前後左右小後。徐。進。出。鎮守府守衛の上將。野太郎時夏。汝が模様。大將小あ。説諭。光仲。廣綱。と。出。せ。と。声。高。方。ゆ。を。喚。り。具。く。く。摠。大。將。七。仲。ハ。頭。小。旗。を。進。め。て。徐。小。馬。を。乗。居。り。と。れ。甚。麼。さ。打。扮。を。但。見。る。花。曇。雲。繻。の。鎧。直。垂。に。小。櫻。威。の。鎧。の。尚。已。時。さ。透。間。も。さ。著。下。く。銀。の。磨。著。の。臍。當。小。精。好。の。奴。袴。を。張。り。せ。小。鶴。と。く。五。尺。三。寸。あり。け。駿。馬。小。遠。山。形。を。金。具。小。磨。り。鞍。と。置。さ。歎。冬。色。の。厚。總。懸。く。二十六。差。く。は。大。鳥。羽。の。征。箭。を。咎。高。小。負。さ。り。兎。を。六。七。率。小。の。せ。と。面。と。コ。ん。せ。ん。為。小。著。む。左。ハ。當。家。相。傳。の。雷。上。動。の。弓。の。真。中。を。握。食。右。ハ。紫。竹。の。

光仲陣頭
時夏
罪惡を責

光仲

佐々木内

同中人



鞭を揚ぐ。時夏をさう。拒た賊將時夏。是れ成知るや。是れを追伐の
 總大将後六位上。三賀藏人光仲まれと高才小名告る。左小間中集
 人あり。右小佐味空内あり。威風凜然。意氣揚々。四下を拂て見えん。久
 御方も敵もかきまぐる。通微妙に大将やとりぬぬのめりけり。時夏を
 暗を定めく。敵の大将を熟視る。不誰うと見え。賀藏人と名告る。久
 媪子井平ある。久賀藏人のく。宵塞で怒り小は堪む。声を激し。
 此度寄るの大将を何人ともひのふ。家の奴隷あり。井平奴であら
 けり。汝は下野に在り。と死主は叛れ。義邦小内通。克復せんと
 逐電せし。不忠無慙の匹夫あり。頼家暗愚の主とて。と見え。汝を
 とり立。数百騎の大将と見え。久小同氣相求る。亡命浮浪の徒。成
 驅催し。追伐の大将と偽り。義邦が為。久も怒成復せんと討る。久ん

そ及ぶ。伎倆之項を洗う。刃を受ると。敦國逼り。罵る。光仲賑然と
 うち笑ひ。汝は人を不義とく。飽き小罵。と見え。その刃の不義。克悪を
 多る。久も。曩小。北條殿の旨。小任せ。汝が家。小身を寓。と見え。素
 より正。小主後。久。その賊情を諫。て。遂に邪を祛り。正。就。今や
 天運循環。久。廣綱。久。吹拳。せ。久。鎌倉殿の御家。久。と見え。逆賊追
 討の大将。久。汝は。是。思。久。背。久。徳。久。情。久。足利。左典。久。既。久。欺。久。て。媚。久。
 經任。久。徴。久。める。久。その。克。久。悪。久。数。久。條。久。枚。久。奉。久。る。久。小。久。違。久。あ。久。を。久。ど。久。衣。久。悪。久。と。久。く
 その。身。久。小。久。聚。久。依。久。是。久。小。久。不。久。赦。久。の。久。大。久。罪。久。人。久。天。久。罰。久。遣。久。る。久。久。を。久。知。久。る。久。克。久。悪。久。を。久。脱。久。死。
 久。束。久。終。久。縛。久。を。久。受。久。り。久。て。久。謹。久。む。久。る。久。時。久。夏。久。を。久。使。久。り。久。て。久。久。を。久。く
 怒。久。く。久。左。久。右。久。を。久。見。久。え。久。り。久。彼。久。生。久。拘。久。め。久。と。久。下。久。知。久。る。久。久。血。久。氣。久。を。久。謀。久。の。久。賊。久。兵。久。久。用。久。成
 咄。久。と。久。幾。久。は。久。箭。久。を。久。射。久。り。久。鋒。久。と。久。舞。久。し。久。備。久。を。久。乱。久。し。久。競。久。鬼。久。守。久。直。久。高。久。利。久。一。久。隊。久。は

二百騎を魚鱗小備へ鶴翼小捺合せく火水ふましと攻りたる。
 勢ひ當りたるに賊軍忽地小閑死靡れく八反あり引退き且戦ひ
 且之りく敵誘ふと數町あり。龍蛇茂林ゆを近つたる。この時日ハ
 たる没果て天ハ陰霾の平日よりも黄昏を中よりある時分なりと
 時夏ハのいれり要時踏とあり。戦ひのまご十合不及びと刃を引く逃
 走と高利守直馬飛一達返せと追蒐り。かる折も暗號とあ不
 えく寄心の陣ハ一道の烽火閃光沖る程丁そあ龍蛇茂林乃後の
 之下り猛火忽然と力え出と勢のま少入定らるねど訝小響く閑の声大
 地も崩る可き草を撲箭を射うけ。駈立と進む程ハ時ハも春の
 季と夜ハ烈ハ山下風小衆木一圓猛火小燒と一日よりある
 明りけは小隠と敵待の蘇塗暴道大ハ駭死庸成遣り

過さ小暇きく。百騎の賊兵侶共小處を樹蔭をむく高利守直
 彼引包で撃つ。田よりとまなく進む戦ふはふふ又茂林の中よりして下
 河邊高吉ハ五十名の士率と中ハ煙を犯し途次横断し。と接く
 擦るにげき。時夏暴道辟易しくこと彼のとも小出碎さるる前
 後の敵を防はる。路を求めて脱んと。當下先仲摩らち揮り軍ハ
 十餘勝とほぞ。かれくと下知小將火も勇將の下ハ弱率あるに衆皆
 先を争やく。奮撃突戦せざるもろは。廣細ゆ又後陣を進めく。
 三方より擦合せ漏さる。とぞ蘿立は。いと列ハ戦ひ小賊兵の
 度を失ひく。或ハ騎馬ハ踏殺さ。或ハ已ハ大刀長刀ハ碎れ。さるく
 刃成脱る。のハ煙ハ嘖び。敵ハ燒き。屍ハ累々と。さるく血を

滾々たる川小舟なり。さる程小四百餘騎の賊兵大うさるる程、
 暴道時夏也。数个如浅濊を肩あがり。純よ九餘名を招く。稍
 活路を死り開け城を投して走る。既雨く暮れひまら寄りの
 軍兵も間道小あやう暴道時夏見えりて。かえりて息を
 馬を府城に馳せせし。暫の橋小立駐り城戸を開け。呼ぶ。年尚
 少死武者西入城樓の窓を颯とひ死て暴道未とさ。招はれ
 ちや當城ハ吾們既小乗取ら。疑く名告くゆせん。是ハ故の般石
 井の領主信夫莊司元春が家臣あやう。水草十郎昌甫が子太
 郎五昌之城戸二郎守詮が弟同苗四郎武詮あり。君父乃賊
 雪ん為小撃残され。古傷輩の義士あやう。あひく小相譚ハ寄りの
 陣所へ推参り。志気述べんとあ折汝はけり。も數兵端くと城を出

為爲体をいずも窺ひ知り。不意小起り。當城を攻落し。ま
 賀殿へ見参の牽り物小進ら。物足ととくその首どもを。
 みぐぐ贈りあはる。飲みか。撃と。田うと。あ。野の兵服と敲て関を
 咄と幾つ。箭を射かると。雨のふり。前小立る。賊兵小矢度小入
 射殺さ。五入深濊を肩ひ。暴道時夏やも。呆と。一言半
 句の間答ふ。及ぶも馬の鼻頭を牽り。平泉のく。逃る程。
 高利守直高吉。ホ士率を驅立。近つて。縦横を礙小。破立。不
 幸して。落延び。宵闇。さ。暗の。往方も。それ。な。高利
 ホ。馬疲。方。再び。これを。追。か。程。小。光。仲。廣。綱。を
 備を。乱。さ。馬を。進。め。鎮守の。府城。に。近。つ。け。城。戸。四。郎。武。詮。ハ

同志の兵小生擒を牽立させ城より出く光仲廣綱小名傳を
 呈し水草太郎五昌之と申謀をりて當城を乗取りしる疾
 告く襲取つる衆賊の首級を實檢りて入しふけはるる光
 仲もさるるを疑なくきびく質問ける信丈莊司が餘類と
 既小證跡分明あるがふく然びくその忠孝を稱賀し生擒の賊
 兵亦或誅戮しくみか首どもを梟させ廣綱侶共士率をりて償
 せし城小入る程小水草太郎五昌之の二十名の兵と申城
 戸を開く迎けり畢竟武詮昌之のホのりて謀をりて輒城を
 乗取るとるそ次巻小解分るをりてとるる

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之一終

